

RLM ライセンス

オンプレミス版/クラウド版

概要説明

2024 年 4 月



株式
会社

アーク情報システム

目次

1. はじめに.....	1
2. オンプレミス版.....	2
2.1. 概要.....	2
2.2. システム要件	3
3. クラウド版.....	4
3.1. 概要.....	4
3.2. システム要件	5
4. RLM ライセンス.....	6
4.1. 運用ケース.....	6
4.2. ライセンスのローミング.....	8
5. サーバ管理.....	9
6. 製品起動までの流れ	10
6.1. オンプレミス版	10
6.2. クラウド版.....	11

1. はじめに

製品の使用権限を「ライセンス」と呼びます。TDAPIIIおよび関連ツール（以下、単に製品という）を使用する際には、RLM ライセンスサーバからネットワーク経由でライセンスを取得する必要があります。本書では、RLM ライセンスの概要、製品起動までの流れ、および RLM ライセンスの運用方法について説明します。

※ RLM(Reprise License Manager)は [Reprise Software 社](#)の製品です。

ライセンスサーバの運用形態として、オンプレミス版とクラウド版(有償オプション)のいずれかを選択できます。

- オンプレミス版

自社内にライセンスサーバを構築する形態で、インターネットに接続できない環境でも運用できます。

- クラウド版

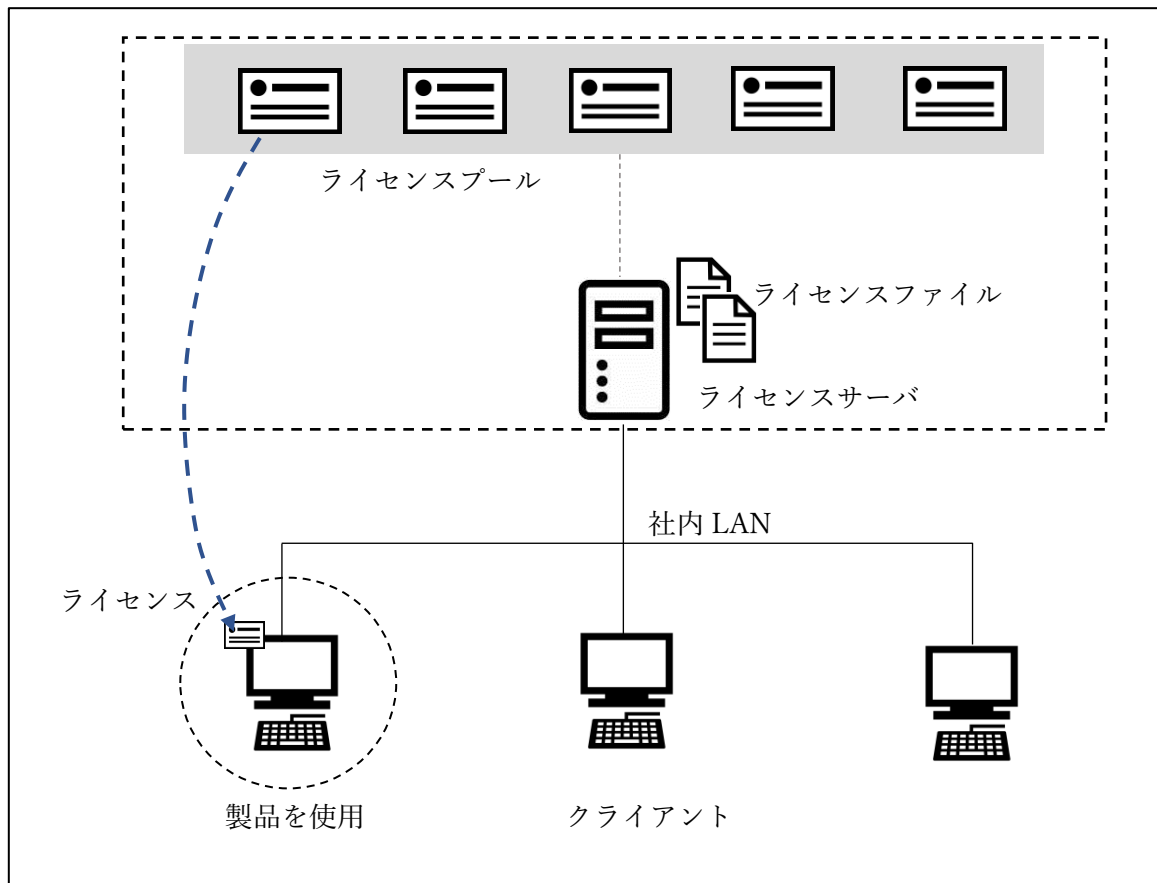
インターネット上に公開されている Reprise Software 社が管理するライセンスサーバを使用する形態で、自社内にライセンスサーバを構築する必要はありません。

2. オンプレミス版

2.1. 概要

オンプレミス版では、お客様自身でご用意いただいた PC に、ライセンスサーバプログラムをインストールします。ライセンス取得までの概要を以下に示します。なお、導入時の具体的な作業手順は 6.製品起動 までの流れを参照下さい。

- クライアント（製品を実行する PC）上で製品を起動した際に、該当するライセンスを取得（チェックアウト）します。
- 終了時にライセンスを自動的に返却（チェックイン）します。



※クライアントとサーバは同一の PC でも問題ありません。

※サーバの変更は、PC の故障等やむを得ない事情の場合にのみ限られます。

2.2. システム要件

○ ライセンスサーバ側

- Windows 64-bit / 32-bit, Linux 64 bit / 32 bit
- (Linux の場合)glibc バージョン 2.12 以降
- (Linux の場合)linux カーネルバージョン 2.6.15 以降
- ブラウザが使用可能であること
- 以下に示すポート番号とプロトコルで通信可能であること

用途	トラフィック の方向	通信 プロトコル	ポート番号
クライアント – ライセンスサーバ間の通信	インバウンド	TCP & UDP	ポート # A * ¹
ウェブインターフェース ポート	インバウンド	TCP	ポート # B * ²
クライアント – ライセンスプール間の通信	インバウンド	TCP & UDP	ポート # C * ³

*¹ デフォルトは 5053 です。任意のポート番号を指定することもできます。

*² デフォルトは 5054 です。任意のポート番号を指定することもできます。

*³ ライセンスサーバ起動時に自動的に割り当てられます。任意のポート番号を指定することもできます。

○ クライアント側

- TDAPⅢのシステム要件に準じる
- (Linux の場合)glibc バージョン 2.12 以降
- (Linux の場合)linux カーネルバージョン 2.6.15 以降
- 以下に示すポート番号とプロトコルで通信可能であること

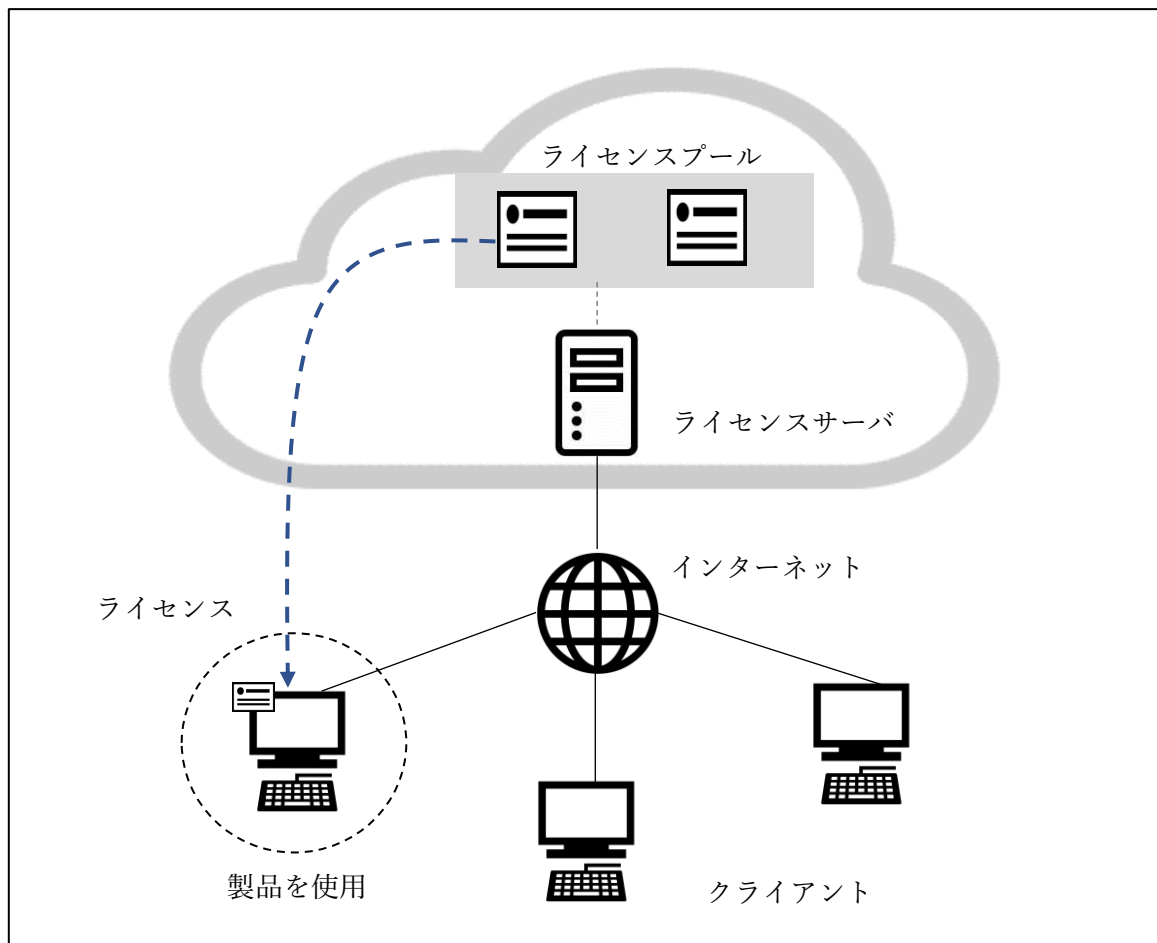
用途	トラフィック の方向	通信 プロトコル	送信先ポート番号
クライアント – ライセンスサーバ間の通信	アウトバウンド	TCP & UDP	ポート # A
クライアント – ライセンスプール間の通信	アウトバウンド	TCP & UDP	ポート # C

3. クラウド版

3.1. 概要

クラウド版では、インターネットを介して Reprise Software 社が管理するライセンスサーバ (RLMCloud) からライセンスを取得します。ライセンス取得の流れを以下に示します。

- クライアント（製品を実行する PC）上で製品を起動した際に、該当するライセンスを自動的に取得（チェックアウト）します。
- 終了時にライセンスを自動的に返却（チェックイン）します。



3.2. システム要件

クライアント側において、以下に指定するポートとプロトコルで通信する必要があります。通信方式を以下の二種類から選択できます。

○ HTTP 通信を使用する場合

- TDAPⅢのシステム要件に準じる
- (Linux の場合)glibc バージョン 2.12 以降
- (Linux の場合)linux カーネルバージョン 2.6.15 以降
- 以下に示すポート番号とプロトコルで通信可能であること
- インターネット接続ができること

用途	トラフィック の方向	通信 プロトコル	送信先ポート番号
クライアント – ライセンスサーバ間の通信	アウトバウンド	TCP	5053
クライアント – ライセンスプール間の通信	アウトバウンド	TCP	RLMCloud のシステムに より自動的に割り当てら れるポート

○ HTTPS 通信を使用する場合

- TDAPⅢのシステム要件に準じる
- (Linux の場合)glibc バージョン 2.12 以降
- (Linux の場合)linux カーネルバージョン 2.6.15 以降
- 以下に示すポート番号とプロトコルで通信可能であること
- インターネット接続ができること

用途	トラフィック の方向	通信 プロトコル	送信先ポート番号
クライアント – ライセンスサーバ間の通信	アウトバウンド	TCP	443

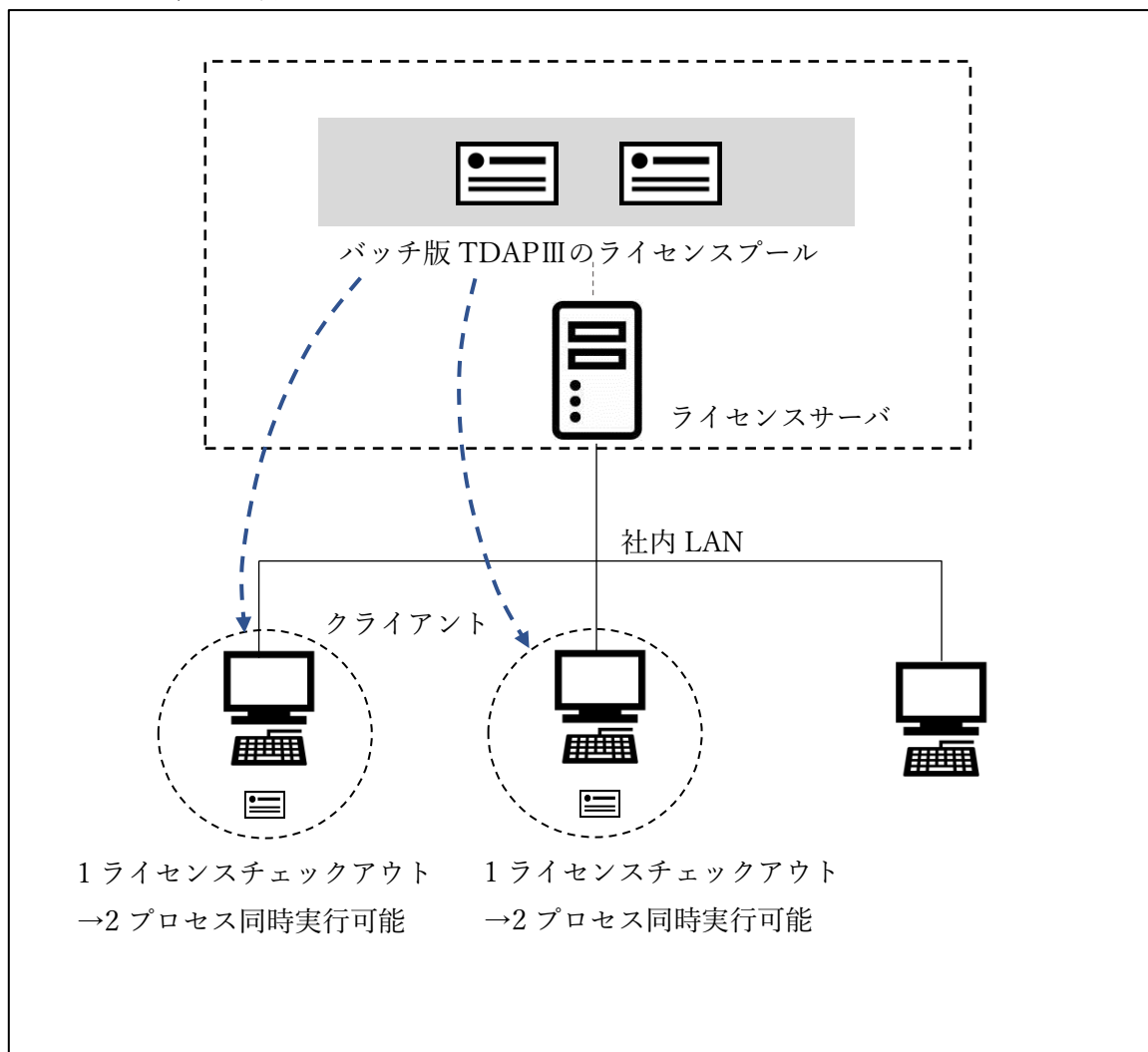
4. RLM ライセンス

RLM ライセンスは製品別に発行され、ユーザー番号、有効期限など様々な情報を含みます。

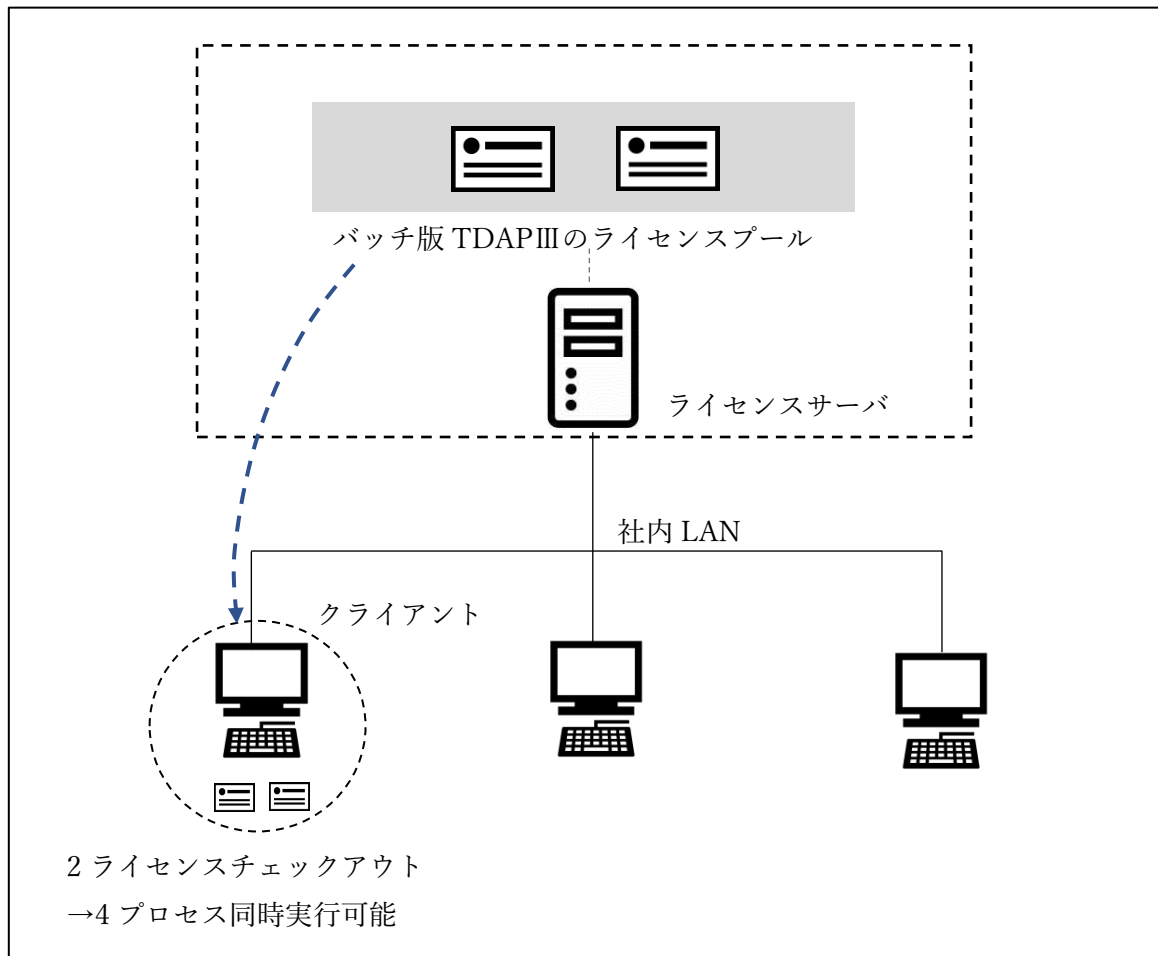
4.1. 運用ケース

例として、バッチ版 TDAPIII のライセンスが 2 つある場合のオンプレミス版の運用ケースを示します。なお、クラウド版でも同様の運用は可能です。

運用ケース 1) 2 台のクライアントがそれぞれ 1 ライセンスをチェックアウトする。



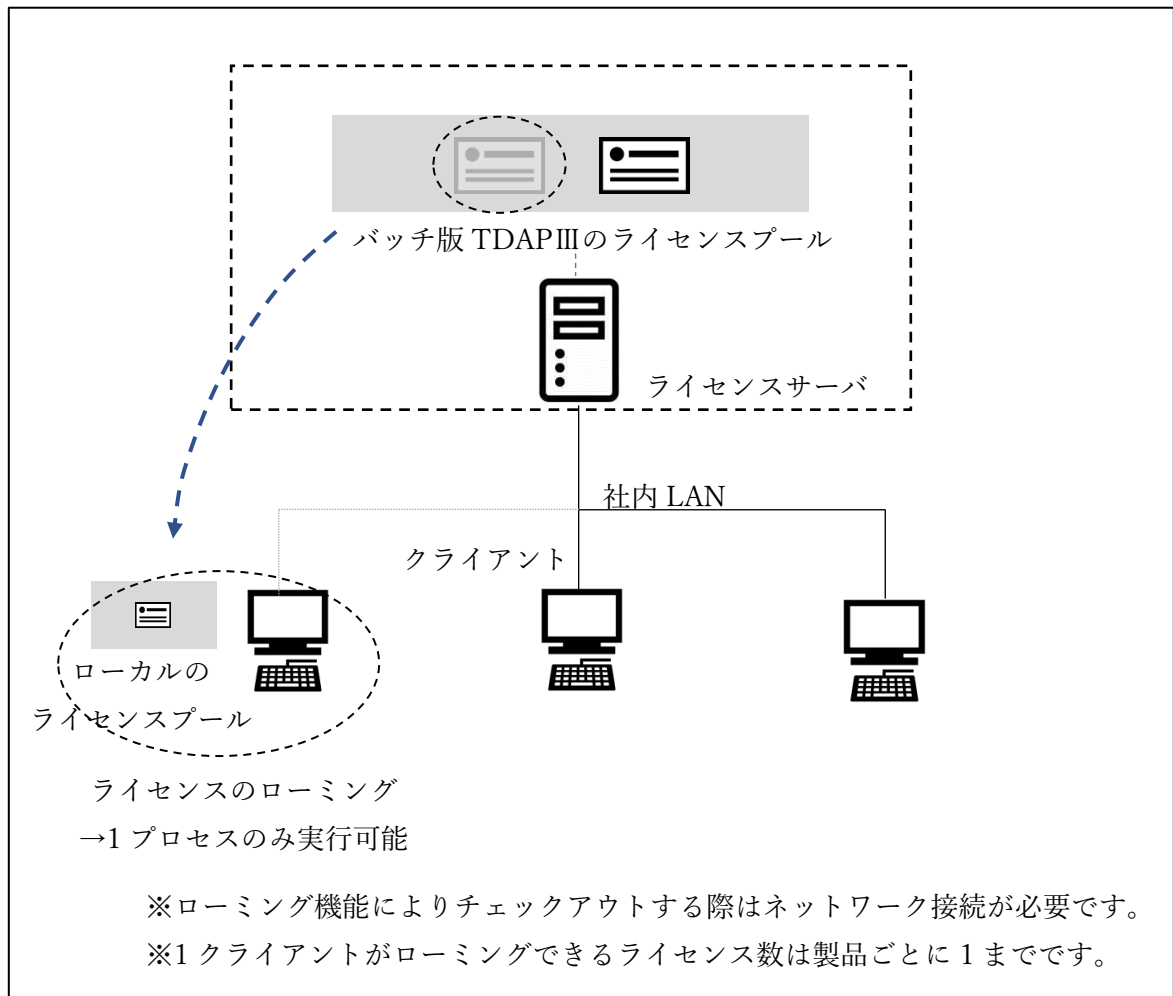
運用ケース2) 1 台のクライアントが2 ライセンスをチェックアウトする。



4.2. ライセンスのローミング

ローミング機能を用いると、ライセンスを一定期間チェックアウトすることが可能です。これにより、ネットワーク接続の無い環境でも製品を使用することができます。

ローミングしたライセンスは通常のライセンスとは異なり、1プロセスのみ実行可能となります。



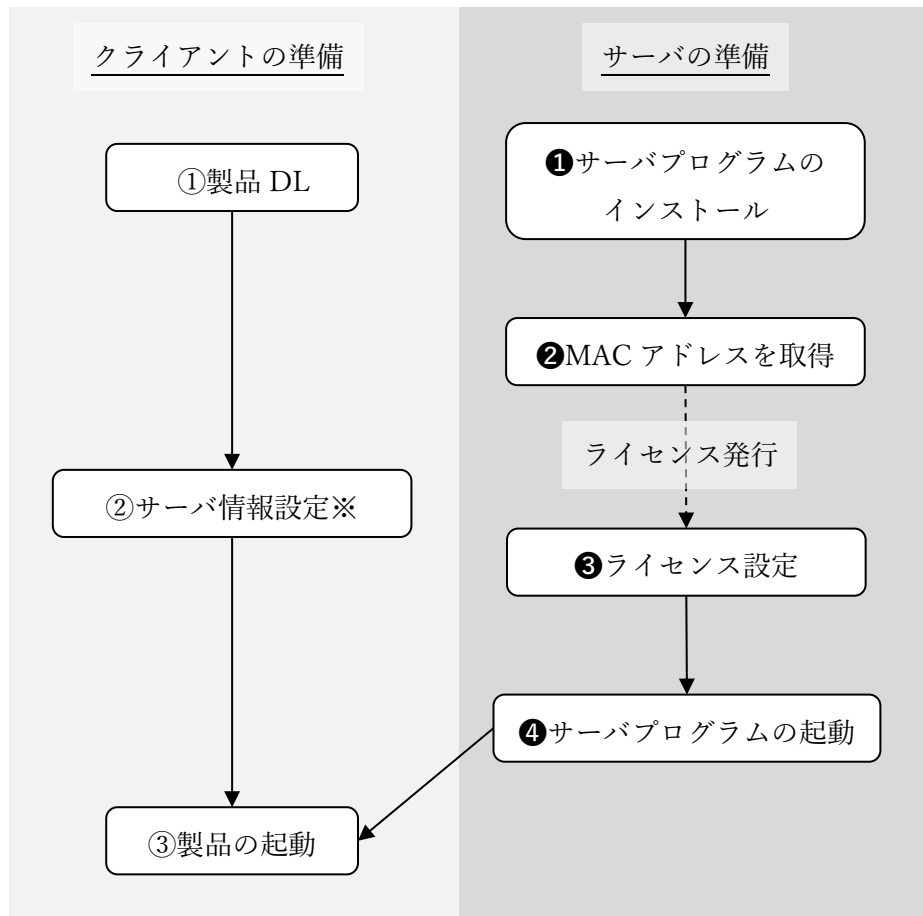
5. サーバ管理

サーバ管理者は、オンプレミス版の場合はサーバ管理画面、クラウド版の場合はユーザーポータルサイトで次の内容を管理することができます。

- （オンプレミス版）クライアントのサーバ管理画面へのログインアカウント
- （オンプレミス版）クライアントのサーバ管理画面での権限制限
- （クラウド版）クライアントのユーザーポータルサイトへのログインアカウント
- ライセンスの強制チェックイン
- ライセンスのチェックアウト・チェックインなどのログの出力
- ライセンスをチェックアウトできるクライアントの設定
- ローミングライセンスの期間延長

6. 製品起動までの流れ

6.1. オンプレミス版



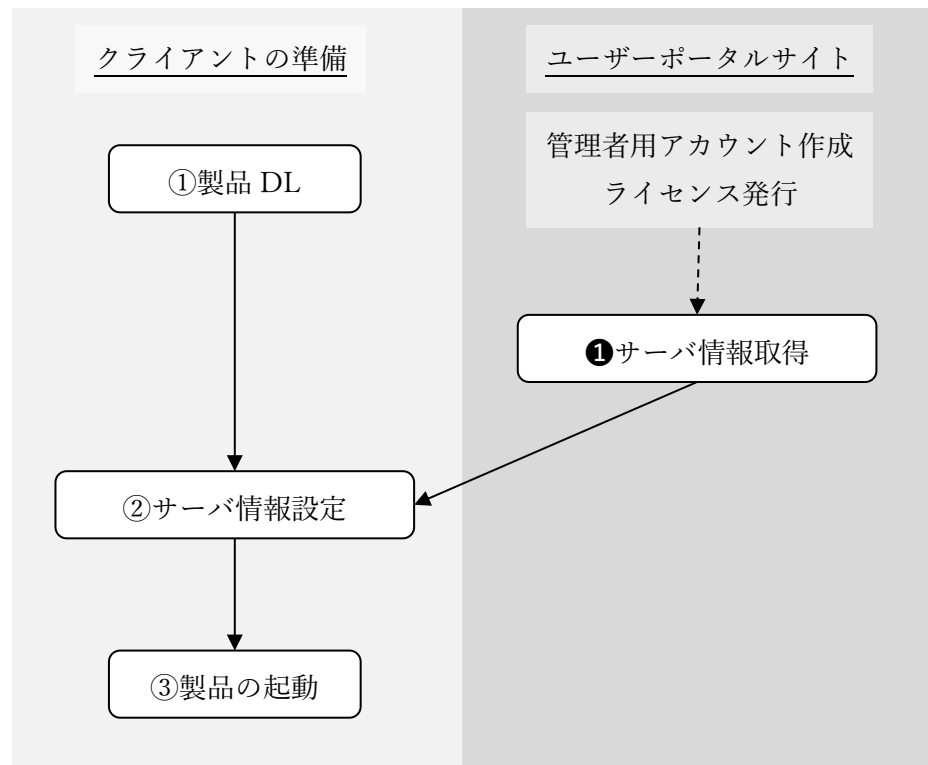
サーバの準備

- ① ライセンスサーバとして稼働させるマシンに、サーバプログラム（インストールイメージに含める予定）をインストールします。
- ② インストールした中にある補助ツールを実行し、マシンの MAC アドレスを取得します。取得した MAC アドレスは弊社にメールでお知らせください。弊社にてライセンスを発行します。
- ③ 発行されたライセンス（電子署名されたテキストファイル）を所定の場所に配置します。
- ④ サーバプログラムを起動します。

クライアントの準備

- ① TDAPⅢユーザーページにログインして製品をダウンロードし、インストールを行います。
- ② サーバ情報ファイル（ホスト名または IP アドレスなどが記載されたテキストファイル）を配置します。※ただし、サーバがブロードキャストの届く範囲（ブロードキャストドメイン）内にあり、かつサーバが一つのみであればこの設定は不要です。
- ③ ④でサーバプログラムの起動が完了したら、製品を起動できるようになります。

6.2. クラウド版



ユーザーポータルサイト

弊社にてクラウド上のサーバを立ち上げ、サーバ管理用サイト（ユーザーポータルサイト）の管理者用アカウントを作成します。

- ① ユーザーポータルサイトにログインし、サーバと通信を行うためのサーバ情報ファイルを取得します。

※管理者用アカウントからクライアント用の権限が制限されたアカウントを作成することが可能です。クライアント用のアカウントからもサーバ情報ファイルが取得可能です。

クライアントの準備

- ① TDAPⅢユーザーページにログインして製品をダウンロードし、クライアントマシンにインストールを行います。
- ② ①でサーバ情報ファイルを取得し、所定の場所に配置します。
- ③ 製品を起動できるようになります。